

曲目解説

喜歌劇「詩人と農夫」序曲 スッペ作曲／マチョッキ編曲

フランツ・フォン・スッペは19世紀のウィーンで活躍した作曲家で、この曲の他にも「スペードの女王」「軽騎兵」等有名な序曲を作曲しています。この時期のウィーンでは、ワルツ王ヨハン・シュトラウスも活躍していて、劇場ではオペレッタ（喜歌劇）が大変流行っていました。スッペは「天国と地獄」で有名なオッフェンバックと同じ年でもあり、互いに大いに刺激を受け、多くの喜歌劇を作曲しています。

この「詩人と農夫」は一般に喜歌劇の序曲とされていますが、現在その喜歌劇の内容は残されておらず、そもそも「詩人と農夫」という喜歌劇が存在したのかさえ不確かとなっています。喜歌劇の序曲ではなく普通の劇の付随音楽だという説もあるようです。

曲は冒頭のファンファーレに続き、どこことなく「線路は続くよどこまでも」によく似たメロディをマンドラが演奏します。主要部に入るとシンコペーションを生かしたいかにもスッペらしい軽快な旋律が登場し、そして中間部には優雅なワルツも登場します。全曲を通して楽しい曲想が織り交ぜられたこの序曲は、現在でも数多くのオーケストラで演奏され親しまれています。

弦楽四重奏曲第2番より「夜想曲」 ボロディン作曲／小穴雄一編曲

アレクサンドル・ボロディンは1833年にグルジア皇室の落胤として生まれました。皇室には入りませんが優れた教育を受け、生涯にわたって第一線の医学研究者として、特に化学の世界において多大な功績を残しています。同時に名高い「ロシア五人組」の一人として当時の国民音楽醸成に熱い意欲を燃やし、作曲家としても非凡な才能を見せましたが、結果的にそれを本業とせず「日曜作曲家」を自称しています。多作家ではなかったものの、歌劇「イーゴリ公」をはじめ、2つの交響曲や交響詩「中央アジアの草原にて」等、独創的な音楽世界を構築し傑作を残しています。

本曲「夜想曲」は《弦楽四重奏曲第2番》の第3楽章で、この上ない抒情美をたたえた非常に人気の高い作品です。三部形式とソナタ形式、変奏曲形式が折衷されたものとなっていますが、どこか東洋風で懐かしく、NHK-FMの深夜番組「夜の調べ」のテーマ曲としても長い間親しまれてきました。その名の通り星空に思いをはせるかのような非常にロマンティックな音楽です。

弦楽のための組曲 ラター作曲／松永恒一編曲

ジョン・ラターは、多くの宗教合唱の作品で知られているイギリスの作曲家・指揮者です。その作風は現代の作曲家としては異例なほど保守的で、前衛的・実験的な要素はほとんど見られません。作品にグレゴリオ聖歌や民謡を積極的に取り入れることもあり、聴く人に親しみやすさを与えています。合唱団ケンブリッジ・シンガーズを結成し、また自身の専用レーベル Collegium Records を設立するなどの活動もしています。

「弦楽のための組曲」はイギリス民謡に基づいた組曲で 1973 年の作曲。気品のある温かい旋律と鮮やかな印象を持つ次の 4 曲からなっています。

I) A-Roving 「さすらい」

II) I have a bonnet trimmed with blue 「私の青い縁取りのボンネット」

III) O waly waly 「おお ウォリー ウォリー」

IV) Dashing Away with the Smoothing Iron 「アイロンをかけまくる」

「さすらい」は動きが軽快で潑刺としたイメージが膨らみます。二曲目は「私の青い縁取りのボンネット」。原曲には、一緒に踊ってほしい彼は航海中、私のポルカの帽子も淋しくて…という歌詞がついています。三曲目は「おおウォリー ウォリー」。スコットランド語でああ悲しい、という意味。時に移ろい朝露のように消えていった愛の歌を各パートがたっぷりと歌います。一度耳にすると忘れられないこの印象的なメロディは、”The water is wide”というタイトルでアメリカでもさまざまな歌手が好んで取り上げ歌っています。9 月まで NHK で放送されていた連続テレビ小説「花子とアン」の中で印象的に使われていたので、耳にされた方も多いのではないのでしょうか。フィナーレは奇抜なタイトルで、「アイロンをかけまくる」。原歌詞は早口言葉になっており、題名どおり活発に躍動する 6/8 拍子の曲です。全曲を通して、少し恥ずかしがりやでエレガント、そして潑刺とした若い女性の思春期から結婚生活へと至る心の動きが、ラター独特のさわやかな作風の中に表現されています。本曲は日本でも演奏される機会が比較的多い作品ですが、マンドリン合奏による全曲版としてはこのステージが初演となります。

カヴァティーナとロンドカプリチオーソ 二橋潤一作曲

二橋潤一は、静岡県浜北市出身の作曲家です。東京芸術大学作曲科を卒業後、渡仏しパリ音楽院へ入学。和声法科、対位法科をプルミエ・プリ（首席）で修了しました。作曲、音楽理論をオリヴィエ・メシアン、アンリ・シャラン、ベルナール・ド・クレッチェ、池内友次郎、宍戸睦郎、矢代秋雄の諸氏に師事しました。

作品にはオペラ「三郎信康」、「ギター協奏曲」、吹奏楽のための「寿歌」、ギター四重奏のための「残像」等があり、マルセル・ジョセ国際作曲コンクール第 1 位他多くの受賞歴があります。マンドリンオーケストラのための作品も多く、「妖精組曲」、「ロココ組曲」、「デ

ィヴェルティメント」、組曲「北の大地にて」などが各地の演奏会でよく取り上げられています。

本曲は1990年、奈良女子大学ギターマンドリンクラブ第21回定期演奏会にて委嘱・初演されました。二橋潤一のマンドリン合奏作品は小規模な楽章からなる組曲形式のものが中心ですが、この曲も曲名の通り「カヴァティーナ」と「ロンド・カプリチオーソ」をその名に冠した2つの楽章からなっています。叙情的な旋律が印象的な第1楽章と、快活な主題と和声の移行が特徴的な第2楽章の対比が鮮やかです。特に第2楽章は、氏の楽曲の特色である跳躍的な転調が随所に用いられ、演奏する側としてもともすれば振り落とされてしまいそうなスリルに富んでいます。なお、「カヴァティーナ」は素朴な旋律をもつ歌、「ロンド・カプリチオーソ」は気まぐれな、あるいは幻想的なロンド(輪舞曲)という意味です。本曲は初演後、打楽器の追加・第2楽章の大幅見直しなどが行われています。本日はその改訂版を弦楽のみで演奏します。

夜曲 (ノクターン) コペルティニー作曲

スパルタコ・コペルティニーはイタリアの作曲家、音楽評論家。1906年にパルマ大学の物理学数学科を卒業後、パルマ音楽院の作曲科を修了しその後はその音楽院で教鞭をとりました。

本曲は1905年に作曲され、1926年にイル・プレットロ誌より出版。原題はNotturmoで、ノクターン(Nocturne)のイタリア語であり、夜曲、あるいは夜想曲とも訳されています。三部形式の小品ですが、イタリアマンドリンオリジナルの神髄を把握しているといつてよい佳曲で、緩やかなテンポの抒情にあふれる楽曲です。三つの主題の他に主題をまたいで登場する複数の動機がちりばめられており、シンプルな構成の中に味わい深さがあります。またそれらの主題すべてが主調で始まり、マンドリン系の楽器がすべてトレモロで奏するというのも特徴的で、対立を強調しすぎることなく穏やかな移ろいを楽しませてくれます。本日は第1部で演奏したボロディンの夜想曲に対比し、マンドリンオリジナルの夜想曲として本曲を取り上げました。

マンドリン芸術 マネンテ作曲

ジュゼッペ・マネンテは、1867年音楽家を父としてサンニオに生まれたイタリアの作曲家です。幼少の頃から音楽を好み、ナポリ・ローマで音楽教育を受け、王立陸軍学校附属の軍楽学校を抜群の成績を以って卒業。その後軍楽隊に入隊し、1896年処女作「交響的間奏曲」、序曲「今と昔」を発表しました。以後次々と吹奏楽曲を発表しています。

吹奏楽界で著名でしたが、マンドリン音楽の良き理解者として、マンドリン合奏の為にもすぐれた作品を多く残しています。代表作としては「メリアの平原にて」「白鳥の楽園」「桂

樹の下に」等があります。大胆な音の配列、和音構成、調の変換など多彩な作曲技法を駆使し、マンドリン音楽に大きな活路を与えました。

本曲マンドリン芸術「Arte Mandolinistica」は次の4つの楽章から構成されています。

第1楽章；Allegro deciso

第2楽章；Adagio Cantabile

第3楽章；Tempe di Minuetto

第4楽章；Allegretto Vivacissimo

第1楽章は、和音のダイナミックなフレーズと滑らかで繊細な旋律が交互に絡み合い、格調高く曲が始まります。第2楽章は、優しく短調と長調に微妙に旋律がゆれ動き、第3楽章は軽やかでリズムカルなメヌエット。そして第4楽章は各パートが主旋律を受け渡し、緩急二つのメロディーがからみ合う中、最後には全パート一団となり盛り上げ曲を終えます。いわば起承転結を持ち、小規模ながら交響曲の形式となっています。